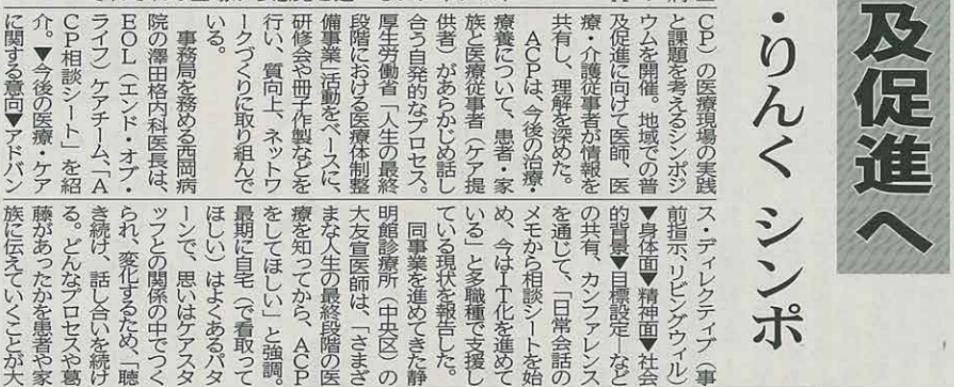


# 「ACP」普及促進へ

## とよひら・りんく シンポ

それぞれの立場から意見を述べるシンポジスト



豊平区の西岡・福住地区を拠点に多職種協働に（会長・中島茂夫西岡病院長）は「アドバーン・ケア・プランニング」（ACP）の医療現場の実践と課題を考えるシンポジウムを開催。地域での普及促進に向けて医師、医療・介護従事者が情報を共有し、理解を始めた。

ACPは今後の治療・療養について、患者・家族・医療従事者（ケア提供者）があらかじめ話し合う自発的なプロセス。厚生労働省「人生の最終段階における医療体制整備事業活動をベースに研修会や冊子作製などを実行、質向上、ネットワークづくりに取り組んでいる。

事務局を務める西岡病院の澤田裕内科医長は、「EOL（エンド・オブ・ライフ・ケアチーム・ACP相談シート」を紹介。▼今後の医療・ケアに関する意向▼アドバン

ス・ディレクティブ（事前指しリビングウイル

ー）、身体面、精神面、社会的背景、目標設定など

の共有、カンファレンスを通じて、「日常会話のメモから相談ミーティング化を進め、今はIT化を進めている」と多職種で支援している現状を報告した。

同事業を進めてきた静明館診療所（中央区）の大友宣医師は、「さまざまな人生の最終段階の医療を知つてから、ACPをしてほしい」と強調。最期に自宅（で看取つてほしい）はよくあるパターンで、思いはケアスタッフとの関係の中につくられ、変化するため、「聴き続け、話し合いを続ける。どんなプロセスや葛藤があつたかを患者や家族に伝えていくことが大

切」とアドバイスした。

「決定について事例を挙げながら説明した。

意見交換では「適材適所で、得意・不得意を補完しながらが大切」、「看護師は慢性心不全患者の中心は患者本人とターゲット（豊平区）の田島瑠子看護主任は腫瘍内科病棟のACP取り組み、福田直之札幌総合法律事務所弁護士は医療現場の自語り合った。